私の工夫

「他」との関わりを大切にし、自己の学びを深める授業をめざして

岡山市立足守中学校
教諭　花房　朋子

1　はじめに

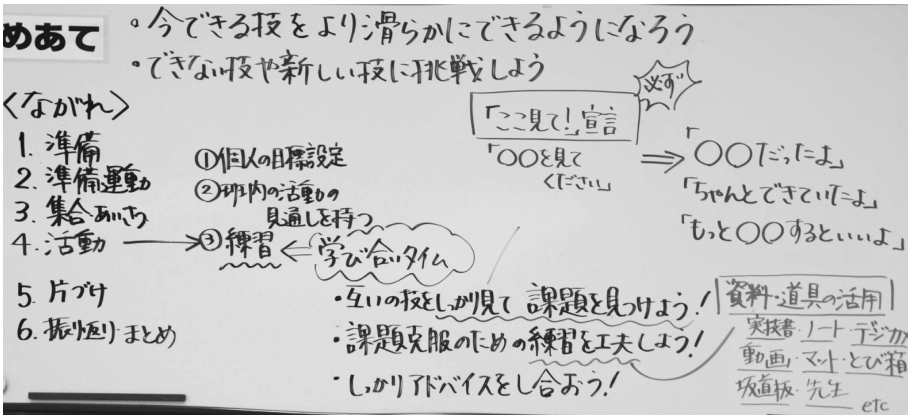
本校では、「共に学びあい高めあうことができる活動をすべての教育活動に」を指導の重点の一つに据えている。『生徒が育つ場は授業』を信念に、すべての授業において協同活動を基盤にし、「学び合い」の活動及び「思考力を育むことにつながる（書く・描く）活動」の確保を実践している。保健体育科においては、そもそも教科の特性上、グループやチームで学習活動をすることが多い。しかし、ただ単にグループ活動やペアワークを行うだけでは、思考力を育てるような学習の深まりは期待できない。ところが、仲間からのアドバイスがあれば、自分の課題に気づいたり、仲間の動きから自分の課題の解決方法を見つけたりすることはできる。そして、学び合いを深める中で、互いの技能向上や学力向上を図ることが可能である。

そこで、「他」との関わりを大切にすることにより、「自己」の学びを深めることにつなげられる授業の展開をめざし、次の実践に取り組んだ。

2　「他」を意識する場面の設定

（1）ながれを示す

体育の授業においては、種目の特性や目標によって単元の構成はさまざまであるが、どんな単元であっても、どこで何を学ばせ、何を習得させるかを考えて目標が達成できるよう授業を構成している。ステージ型・ステップ型・スパイラル型など、どのようなスタイルの単元構成であっても、全体で技能習得のために活動する時間とグループやペアで互いの課題を見つけあったり、その課題解決のための練習を工夫しあったりする「学び合い」の場面を設定している。これは、1時間ごとの授業のながれの中でも同じである。そして、その中で大切なのは、そのながれを予め学習者が理解しているかどうかである。見通しをもって学習に取り組むことにより、「学び合い」の時間をより意識し、その時間を自己の学びへとつなげられると考える。そこで、単元はじめのオリエンテーションでは必ず単元のながれを説明したり、1時間の授業では、できるだけ視覚的にわかるように授業のながれを提示したりするなどの実践を行った。



「ながれ」を示した板書例

（2）学び合いを深める活動スタイルと教材の工夫

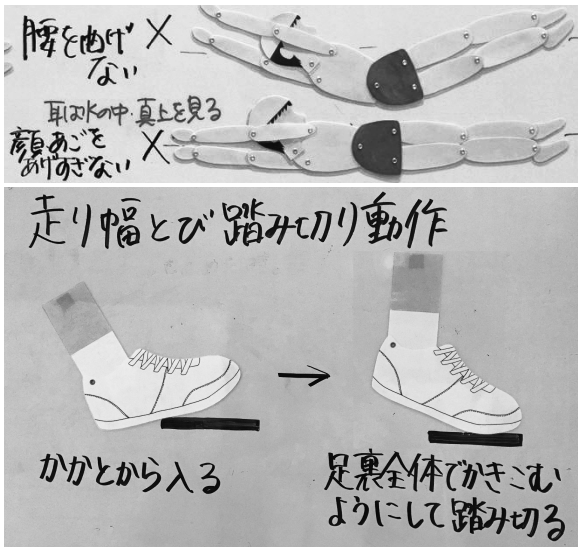
学習者が互いの力で的確な課題を設定し、その解決を図る。そこにその課題解決に役立つヒントやツールがあれば、「学び合い」はより深まると考えた。そこで、各単元とも、「学び合い」の時間には、チームあるいは個人の目標を互いに確認し合い、それを達成するために、どんな活動をしていけばよいかを考える場面を意図的に設定した。また、その活動の充実

のために、技能習得にとってより効果的で、課題解決のためのヒントを与えてくれるような教材・教具を工夫した。例えば、デジカメ、技の動画、補助具、作戦板、可動式提示教具などである。

これらのツールを活用しながら、グループの仲間の課題解決に向けて共に練習を工夫していくことで、自らの課題解決の糸口が見つかったり、自分のつまずきに気づいたりすることができるようになった。

(3) 学習ノートの工夫

本校では、「学び合い」の活動とともに「思考力を育むことにつながる活動」という観点から「書く・描く活動」を確保している。授業のはじめには「めあて」を提示し、授業の終わりにその達成ができたかどうか、本時の学びは何であったかなど自己の振り返りと授業のまとめを行う。そこで使用する学習ノートやリフレクションシートに「他」を意識させる工夫をした。それらの活用により仲間との関わりを大切にし、それを自己の学びにつなげる学習のスタイルが定着しつつある。



自作の可動式提示教具

【自己評価】

よくできた・・・A　少しできた・・・B　できなかった・・・C

日付	意欲的に取り組めた	準備・片付けを協力して行った	アドバイスや補助ができた	練習方法を工夫できた	前時よりできる技が増えた上達した	反省 Bestアドバイスとそこからわかったこと
/						
	【本日の目標】					

当てはまる項目を○で囲む

月/日	出席	服装	準備	活動	片づけ	アドバイス	感想・考えたこと
①	出席 見学 欠席	整っていた 整っていない	できた していない	よく動いた 今一歩	できた していない	よくできた まあまあ していない	

【仲間からのアドバイス】
(　　) より ⇒
(　　) より ⇒
(　　) より ⇒
(　　) より ⇒

「他」を意識できる学習ノートの例

「学び合い」の時間のようす

3 成果

どのような単元であっても基本的な授業スタイルが変わらないため、実践を重ねることで、学習者自身が見通しを立てて効率的に学習に取り組めるようになってきた。これらの授業実践により、「他」とともに学び、自らの学びを深めることができている。また、男女を問わず誰もが仲間と関われるようになったのはもちろん、技能面で苦手意識を持っていても、仲間にアドバイスをしたり、手助けをしたりと「仲間のためになる」ことで、自分に自信をもち、自己有用感を高めることにもつながったことが成果といえる。

4 おわりに

次世代の教育で外して考えることができないのが「主体的・対話的で深い学び」だが、その中で、今後は「課題の発見と解決に向けた主体的・協働な学び」が必要不可欠となる。そこで、今回のような実践に一層努力して取り組んでいかなければならないと感じている。今後もこの視点に立った授業づくり・改善が求められる。カリキュラムマネジメントと年間指導計画の見直しなどの大きな視点と、授業で扱う教材や教具などの細かい視点の両面から、今後も授業づくりを進めていきたい。